

第一回 インクルーシブな遊具広場整備指針検討委員会 議事録

日時：令和4年3月28日（月曜） 17時00分から19時00分まで

場所：エルガーラホール7階 会議室1（福岡市中央区天神1丁目4-2）

出席者：

上角 栄子	インクルーシブふくおか 代表
清水 邦之	NPO法人福岡市障害者関係団体協議会 理事長
野口 信介	東福岡特別支援学校 校長
平井 康之	九州大学大学院芸術工学研究院デザインストラテジー部門 教授
道下 美里	三井住友海上火災保険株式会社 パラアスリート
堀内 規生	パラアスリート伴走者（道下委員補助）
高島 宗一郎	福岡市長

（以下、WEB参加）

龍田 愛梨	東京都議会 議員
-------	----------

【事務局】

福岡市住宅都市局花とみどりのまち推進部みどり整備課

〈開会、注意事項説明等〉

○市長

本日は大変お忙しい中、インクルーシブな遊具広場整備指針検討委員会にご出席いただきまして誠にありがとうございます。委員会の開始に先立ち、一言ご挨拶させていただきます。

今、ご承知の通り世界的にSDGsということで、誰1人取り残さないという理念であったり、全てを包み込む、包含するという、インクルーシブという概念が、多くの方に認知をされるようになり、優先順位が非常に上がってきているという流れに、ようやく日本もなってきたな、という感じがする。

福岡市では、天神ビッグバンとか、一人一花運動とか、わかりやすいキャッチフレーズでいろんな取り組みをしているが、私が市長に就任して、一番最初の年に、ハードソフトをともに、という意味合いを込めて作ったのが「みんなが優しい・みんなに優しいユニバーサル都市福岡」。

バス停とか、街中へのベンチの設置、ノンステップバス、それから地下鉄、その車両、公民館などに、ユニバーサルデザインを取り入れてきた。

今回テーマになる公園についても、これまで園路、入口、トイレのバリアフリー化など、そういった部分については進めてきたが、『遊び場』についても、そうした取り組みをぜひ進めていきたい。

私自身がこうした遊具があるのだということを知ったのが、今日、オンラインで参加をいただいている龍門東京都議のフェイスブックの投稿を見かけて、インクルーシブな公園の存在を知った。龍門都議はこのインクルーシブな公園の発信をされていて、一生懸命これに取り組んでいる姿を見て、これは素晴らしいなど。

障がいのある子もいない子も含めて一緒になって、楽しめるような場所が地域の中に存在したら、なんて素敵なお話だろうと思いき、龍門さんにもお話をお伺いして、また、実際に、東京都の砧（きぬた）公園にある「みんなの広場」を見に行き、公園で遊んでいる方にも声掛けをして、いろんなお話を伺い、東京都の職員の方にもお話を伺った。今日は龍門さんにもお話を聞かせていただけるといことで、楽しみにしている。

実証実験を、去年の11月に舞鶴公園で行ったが、ものすごく反響が大きくて、9日間で2400人の方がお越しいただいた。望む声が大きいくことを本当に実感した。障がいがある子もいない子もみんな楽しめるということで、みんなにとって、すごくいい公園だなあと思って、それで今回、検討委員会を立ち上げて、これから福岡市の公園に実装していく中において、それぞれの立場から、幅広くご意見をお伺いしつつ、今年行う2回目の実証実験では、障がいのある子ども、保護者などから更なるニーズ調査を行って、いろんなご意見を伺いながら、整備の指針を策定して整備を進めていきたい、という風に思っている。

ちなみに龍門さんからも、やはり地域の方とか当事者の方も最初の段階から巻き込んでいって、「自分たちの公園なんだ」という意識を高めていくことが、すごく大事ということ、以前お伺いしていたので、そんなこともぜひやっていきたいと思っている。いずれにしても、これからこうしたインクルーシブな公園に対する理解も広げていきたいし、具体的な整備、場所も含めて幅広く、忌憚ないお話を聞かせていただきたい、そんな委員会にできればと思っているので、どうぞよろしくお願ひします。

〈委員紹介〉

○委員

私たちの団体は、障がいのある小学生前後の子どものいる保護者たちでつくった。障がいのある子どもたちと健常なお子さんたちが楽しく触れ合いながら、お互いを知り、体験をとおして

自然に障がい者への理解を育んでほしいと思い、毎年、『唐人町こどもハロウィン』というイベントを、福岡市さんから助成金をいただいて行っている。唐人町商店街さまのご協力もいただき、コロナになる前までは、100名近くの子どもたちが参加していた。今後も地道に啓発活動をしてまいりたい。よろしくお願いします。

○委員

私どもの団体は、福岡市内にある福祉施設、当事者団体の方々が集まって組織している。

皆さん方に、一番なじみがある活動が、12月の第1日曜日にやっている、『障がい者週間記念の集い』。福岡市役所西側広場を使って、啓発活動を行っている。昨年は、何とか実施できたが一昨年はコロナの影響で中止。昨年は人数制限など、色々な制限の中で実施した。

クリスマスマーケットというイベントと併せて、同じ会場で、毎年開催していた時は、非常に多くの方々に、会場に来ていただいて、私たちも非常に啓発活動の実績ができていたのではないかと考えている。まだまだコロナが収束するという目途が立っていない状況の中だが、私たちも障がいの当事者の立場、それから、先ほど市長もおっしゃっていたが、「みんながやさしい・みんなにやさしいユニバーサル都市福岡」、これの実現に向けて、もっともっと啓発に力を入れていこうと活動している。よろしくお願いします。

○委員

本校は、主に知的障がいのあるお子様が通っている学校で、小学部、中学部、高等部と就労に向けて、小学部から一貫した教育を行っている。個人的には、小学校の校長、福岡市教育委員会の発達教育センター所長の経験があり、市民の皆様方のいろんな声を耳にしてきた。平成19年度からインクルーシブ教育システムが急に加速してきており、その中で、環境づくりはとても大切である。先ほど市長からもお話があったように、福岡市は、そういった面では、先を進んでいるということ、他地域からもたくさん聞いている。そのような中、この場にお招きいただき、皆様方と意見交流ができることを本当にありがたいと思うし、学校現場にも還元できるともたくさんあると思っている。どうぞよろしくお願いします。

○委員

私は、インクルーシブデザインというインクルーシブ公園に非常に近い領域のデザインに携わっている。実は、日本で一番最初にインクルーシブデザインのワークショップが開かれたのは福岡である。2004年にイギリスから研究者の方を招いて、九州大学大橋キャンパスでインクルーシブデザインのワークショップをやったのが日本で最初。そういう流れがある、それが、高島市長が主導してやっておられる、ユニバーサル都市福岡に繋がっている。

その中でデザインチャレンジという形でやってきたので、そういった流れを、ぜひこのインクルーシブ公園でも盛り上げていきたいと思っているので、よろしくお願いします。

○委員

私は普段、パラアスリートとして練習で週3回から5回、大濠公園を利用している。大濠公園ブラインドランナーズクラブに所属をして、スタッフとして幅広くいろんな人たちにスポーツの楽しさや喜びを伝えるような活動をしながらかつ活動をしている。

大濠公園は、本当にたくさんの方がルールを守って利用しているので、秩序が保たれていると感じる。私自身、「視覚障がい」というビブスをつけ、視覚障がいがありながらも楽しく・安全に走らせてもらっている。利用者がお互い気づかい、思いやる気持ちに溢れている公園だからこそ、すごく楽しく競技活動をさせてもらっているのかなと思う。スポーツや遊びを通し、体を動かすことの喜びや楽しさを誰もが経験できる。そんな公園になるように、利用する立場から何か

お伝えできればと思い参加させていただきました。分からない事ばかりなので、みなさまの話を伺いながら勉強させていただければと思います。今日はよろしくお願いします。

事務局

本日は、インクルーシブ公園を日本のスタンダードにすることを目標に活動されている、東京都議会議員の龍門愛梨議員に、先進事例などについてご講演いただくため、リモートでご参加いただいている。龍門議員は、テレビ局のアナウンサー、報道記者として務められ、2017年より東京都議会議員としてご活躍。ダウン症のあるお子さんの母として、海外で生活された経験から、インクルーシブ公園の整備を提案。この提案をきっかけに、インクルーシブ公園の東京都立砧公園の『みんなの広場』が整備された。

本日は、議事に先立ち、先進事例のご紹介等の講演をいただく。

○講演者

リモートで申し訳ない。本来はお伺いしたいと考えていたが、少しまだコロナが心配ということで、今日はオンラインで参加させていただく。福岡市は、非常に参考になる政策がたくさんあり、視察にも伺っている。そんな福岡市にインクルーシブな公園ができるということで、とても楽しみにしている。では、いろいろ事例を紹介させていただきたい。

〈講演〉

○市長

龍門さんありがとうございます。

背景にひとつひとつにたくさんのエピソードがあっただろうことを、相当なエッセンスを注ぎ込んで、これまでの経緯から、目的から、お話いただいた。全体的に聞いて印象的だったのは、私たちの目的は、公園を作るのではなく、その先があるということ。まちをつくるコミュニティを作っていくことはすごく大事で、一つの公園をつくるという過程を通して、コミュニティをどう形成していくか、そして、最終的にはそれこそが、みんながやさしい・みんなにやさしいまちをつくっていく。ハードもソフトも含めてっていう、そのきっかけなのだろうなあということが、今お話伺いながら思ったので、公園を通してまちづくりをしていく、インクルーシブなまちをつくっていくということを心がけていきたいという感想を持った。その上で質問であるが、今のお話を進めていく中で、大変だったところ、一番苦労したところを教えてください。

○講演者

私自身の苦労というよりも、東京都建設局の苦労ということで言うと、日本にこういう公園がまだ普及されていない中で、まだ見たことがないものをみんなで作るっていうところが一番苦労したのではないかというふうに思っている。この東京のノウハウをどんどんみんなに発信して、他の自治体さんが、取り組みやすいようにしていきましょうねという話はしてきた。

実は立候補する前からこのインクルーシブな公園っていうお話をさせていただいていたので、区議会で提案したときは「ずっと言ってたよね」っていう形で、東京都もこのダイバーシティ&インクルージョンっていうのを非常に大切にしているので、「今までになかったけれども確かに必要よね」っていうリアクションですぐ動いてくれたというのが印象的でした。

○委員

今、活動が各地に増えてきていると思うが、都を超えた全国的なインクルーシブ公園のコミュ

ニティづくりであるとか、何かそういったことは、これからされていくのか、もうされているのか。

○講演者

だんだん、日本各地に広がってきたので、東京都もホームページの作成などは始めたところだが、ぜひ、いろんな自治体の方々と一緒にコミュニティを作っていきたいという風に私自身は今感じている。ちなみに昨年亡くなった父が九州大学出身でして、九州大学の委員の参加があり、何か縁があるのかと嬉しく思う。ありがとうございます。大変光栄です。

○委員

ぜひ一緒にコミュニティができていけばいいなと思う。

○委員

うちの息子もダウン症なのだが、公園に繰り返し行きたいと思うようになるような工夫はされているか。

○講演者

都立のインクルーシブ公園は、ちょっと大きいですが、今地域版のちっちゃいインクルーシブ公園ができていて、その公園にはプレイリーダーがいたり、コミュニティが育ちつつある。やっぱりそこに行って、会えると楽しくなるような人たちがいる状況になると、繰り返し通いたくなるのではないかなと思う。

都立公園は、結構遠くからも来る保護者さんたちがたくさんいるが、理想としては、遠くから来てくれるのも嬉しいが、ご自身の地域で、それぞれ、インクルーシブな公園で遊べたらいいなという風に思っていて、そこが私の目指しているゴール。

○委員

本校にも知的障がいのあるお子様がたくさん通っており、休み時間とかもとても元気に遊んでいる。子どもの中には衝動性のある子もいるし、なかなか人の中に入れたい子もいる。そのような子どもたちが一つの場所に集って、いろんなことができるというのは本当に夢がある。また、その様子を客観的に見ることで、障がいに対する理解も進むと思っている。

公園設置において鍵になるのが、共生という見方だと思っている。例えば、障がいのある子と障がいのない子が、一つの場所で遊ぶようになったときに、譲り合いであったり、支え合いということが大切になると思う。例えば車椅子のお子さんが活動する時に保護者が介助することが多いと思うが、健常の方、お子さんが介助をすることもあると思う。これらの関わりについては、学校で教育内容として扱ったりするのだが、なかなか実際の場で学んだことを発揮する機会がない。だから、こういう公園があったらいいなと思う。

例えばこの公園の中に、障がい理解に繋がるような看板であったりQRコード的な掲示があったり、何か啓発に繋がるようなものが整備されていたりするのを知りたい。また、保護者の方が休憩している時にいろんな会話がはずむと思う。その会話の中で、障がい理解であったり、共生に繋がるような、その地域づくりに繋がっていった事例のようなものがあれば、教えてもらいたい。

○講演者

都立公園のパターンがベストだという風には、まだ私は思っていないが、でも最初のインクルーシブ公園としては最善を尽くしてくれたと思っている。府中の森公園も砧公園もそうだが、建

設途中からずーっと看板が出ていて、「この公園はすべての子供たちが一緒に遊べる公園ですよ、障がいのある子も一緒に遊べる公園ですよ。お楽しみに」みたいな、まず告知があった。府中の森の方では、各遊具が先に写真でパネル展示されて、それぞれの遊具の名前を子どもたちに公募していた。コロナ感染拡大時で実現できなかったが、事前のワークショップも開催しようとしていた。

今公園の中にも看板が常設されていて、「この公園はみんなのための公園だよ、違いのある子どもたちがいるよ」っていうような表示がある。実際に遊んだ障がい児の保護者さんからは、入口にポンと看板を掲示するだけではなくて、例えば遊具そのものに「この遊具ではこんな子が遊ぶかもしれないよ」みたいなことを、ピクトグラムとかでわかりやすく表記してもらえたらもっといいなという声もいただいている。

さっきのグルグル回るような遊具は背もたれつきで、肢体不自由のお子さんでも利用できるが、回転する側が早く回しすぎると、身体を支える力が少ない子にはやっぱりちょっと危ない。モニタリング調査をしていた TOKYO PLAY さんに聞くと、そういう時は「ねえねえ、ちょっと早く回すと、危ないんじゃない」と誰かが言い始めて、「そうだ、じゃちょっとゆっくりしよう」みたいな形で、子どもたち同士の会話の中から、違いのある子どもに配慮するような姿も見られていたらしい。

あと、私自身の経験で、円盤状のブランコに並んでいるときに、私の前に歩行器具をつけたお子さんがいて、後ろに、いわゆる健常の子がいた。後の子どもがお母さんに、「ここの公園って障がい児のための公園なの？」っていう感じでお母さんに聞いていて、そのお母さんなんて答えるのかなと思ったが、公園の入口に説明がきちんと書いてあるので、「この公園は障がいのある子も一緒に遊べる公園なんだよ。みんなの公園なんだよ。」っていう形で、声がけを子どもにしていた。「あ、これはいいな」と思ったのと、その前のお子さんが、本当に初めてブランコに乗ったんじゃないかと思うほど、もう、「キャー！」みたいな感じで声を上げて喜んでいる姿を、並んでいる子たちが見ていたので、すごくこう、いいな、やっぱこの公園すてきだなと思った。おっしゃる通り、わかりやすい表記が、非常に重要なのかなと思う。あとピクトグラムみたいなものもあったらいいと思った。

○委員

とてもいい光景が目に見え、よい公園だということが良く伝わった。

〈資料確認、事務局紹介〉

〈委員長の選任〉

平井委員を推薦し、承認される。

〈委員長挨拶〉

○委員長

本協議会の委員長に選任されました九州大学の平井と申します。よろしく申し上げます。委員長ということで、いろいろと皆さんの取りまとめをしていく立場にあると思う。これまでユニバーサル都市福岡で、いろいろと関わってきた関係もある。皆さんとは、まさに一つのチームだと思っている。まだまだお互いによく知らない状態だと思うが、それぞれ違う本当に多様な専門の方がおられるわけで、それぞれの立場からいろいろな意見を交換することで、インクルーシ

ブ公園、先ほど、龍円さんおっしゃった、インクルーシブコミュニティ、さらにインクルーシブ社会ということを考えていく。大きく言えば、一つの活動体みたいな流れができると、すごくいいなと思っている。そういう意味でよろしくお願いします。

〈副委員長の選任〉

上角委員を推薦し、承認される。

〈資料説明〉

委員の道下さんについては、視覚の障がいがあるため、説明方法を、事前に相談したところ、コミュニケーションの仕方を知るきっかけで、伴走体験をしてはどうかという提案をいただいた。

映像は、先日舞鶴公園で、道下さんと初めてお会いし、伴走の体験をさせていただいた様子。道下さんの前向きな明るいお人柄と、伴走者の堀内さんのアドバイスにも助けられ、初めて伴走体験をして、引き続き、事前の説明をした。

視覚障がいの方の感覚やコミュニケーションで留意することを学ばせていただき、非常に貴重な体験となった。本当にありがとうございます。

〈資料説明〉

スケジュール及び検討内容案について 資料2

意見なし

○委員長

私の方で少しだけコメントさせていただくと、第2回のヒアリング、ワークショップの結果報告が大事だなと思っている。つまり、ヒアリングが、我々の活動の一番の宝物になると思う。それが、単に「こういうこと言っていましたよ」だけではなく、まず、我々はアスピレーションと呼ぶが、本当に思っていることは何なのか？というところまで深掘りをして、まとめていかないと、いいものできないかなと思う。それをインクルーシブ公園という考え方にフィードバックして、皆さんで整備指針ができたらいいい。

〈資料説明〉

資料3

- ① 福岡市のユニバーサルデザインの取り組み
- ② インクルーシブな遊び場づくりについて
- ③ 福岡市の公園の概要

○委員

初歩的なところになるが、ユニバーサルデザイン、インクルーシブデザインとあるが、ユニバーサルデザインというのは、造形物とかそういったものの機能性をもとに考えたデザインというイメージがあって「誰でも使える」デザインという捉え、インクルーシブデザインになると、それをどう使うかというか、人と人をどう繋ごうとしているのかということまでも求められている気がするが、そういった捉えでよろしいか。

○事務局

デザインに関しては、委員長に教えていただければと思う。

○委員長

では、私の方からちょっとお話する。

先ほどのスライドに、インクルーシブな遊び場づくりについてというスライドがあった。三つの輪が描いてあって、一つ目の輪が、「誰もが利用できる」、二つ目の輪が「遊びが豊か」、で三つ目の輪が「人と地域と緩やかな繋がりがある」という風になっていた。

これ私の理解なので、少し違う面もあるかもしれないが、誰もが利用できるというのはユニバーサルデザイン。ユニバーサルデザインも実は、2000年に大きなブームを迎えて、今も非常に大事な概念で続いているが、かなり意味が変わってきている。最初はやはり、医学的障がいという体の障がいをバリアフリーで解決するというものであったが、もう今では、障害者差別解消法等含め、社会的排除、社会的なバリアの排除が変わってきている。そういう意味で、単にアクセシビリティだけじゃないところに来ている。

インクルーシブが何でそこで入ってきているかということについては、私の私見であるが、「遊びが豊か」という時に、みんなが平等に「遊び豊か」ということもあるが、それだけではない。つまり、私はユニバーサルデザインというのは、インサイドアウトだと思っている。つまり、人口の分布があって、8割の人が真ん中にいて、左右の10%の人が除外され、サービスを受けられていない。じゃあそのメインストリームの人々のサービスをどうやって左右の10%に展開するか、というのは、インサイドからアウトサイド。より広い人が使えるという風になっていると思うが、私はインクルーシブは逆で、アウトサイドインだと思っている。つまり、みんなが同じサービスを受けるのではなくて、アウトサイドつまり、これまでエクスクルード（排除）されてきた人の視点とか遊び方があるので、それを取り入れることで、みんなが「こんな新しい遊び方があるんだ」など、そこで新しいものが生み出される。つまり、インサイドアウトサイドのそのベクトルの方向性の違いは、結構大きいと思っている、そこがこの「遊びが豊か」というところとうまく繋がれば、このインクルーシブ公園が面白くなると個人的に思っている。

〈資料説明〉

資料4

- ④ 舞鶴公園での実証実験の結果
- ⑤ 第2回実証実験について

○委員

昨年11月から実証実験をされたということだが、障がいのある方の利用、それから一般の方の利用とあったが、障がいのある方は、こういう方というのを限定して、どちらかにお願いをして、来てもらったのか。それとも、お知らせして、自由に来てもらったのか。

○事務局

実はこの実証実験が話題になり、ニュースにも取り上げられたため、多くの方は、ニュースを見て来られたようだった。インクルーシブというか、誰でも遊べるんだよ、障がいのある子も遊べるんだよというような発信を、テレビ局や新聞でしていただいて、それを見て「私たち遊べるんだな」ということで来られた。やはりそれだけ大きなニーズがあったという風感じた。

○委員

体験された方の障がい別の割合はあるか。私は、肢体障がいであるが、やっぱり公園で遊ぶというのが、基本ない。よっぽどそういう風な、きちんと整備されてというか整った環境じゃないと、なかなかこう遊ぶというのができなくて。だから、車椅子の方が実際に来て、どういう風に

これ遊んだらいいのかなとか、よく説明聞かないと。利用しにくかったのではないかなと思うが、その辺はどうか。

○事務局

障がい別の利用者は把握していない。次の2回目の実証実験では、その点について、ぜひアンケートを取っていきたい。清水委員の言われる通り、どういった方々が、どういうニーズを持たれているのかを、もう少し細かに把握して、その人たち向けに、どういった使い方があるのかということ、我々が発信しなければいけないと思うので、参考にさせていただく。

○委員

広報で学校の方からチラシが配布されて、私の知り合いの車椅子の方にも行っていただき、私も参加した。

そこで課題の一つだと思うのが、公園敷地のほとんどが砂地であったこと。車輪が砂に埋まるため車いすを自力で動かすことができないという感想があった。あと、大きい遊具のところで、スロープの部分は車いすで通れるが、その突き当りに大きな段差があって先に進めなかった。また、すべり台の滑り面が広がっていたが、これが、かえって不安定になっていて、しっかりしたものがあつた方がいいんじゃないかという意見を聞いている。

他にも遊具だけでなく、遊具周りの環境が一番大事だと思う。バリアフリーのトイレだとかも常識的につけていただいで、遊具も使えないのもちょっとあつたかなあというところで、次回の時に検討していただけたらと思う。

○委員長

もし色々な意見があるようでしたら、まとめていただいで、共有いただくとすごくいい。

○事務局

皆さんの色々な意見を言える場を設けたいという話があれば、ぜひ伺って話を聞きたい。そういうご意見は、とても参考になる。

○委員長

先ほどの第2回実証実験の目的の説明で四つのポイントがあつた。ワークショップ、ヒアリングと書いてあつたが、内容がよくわからなかつた。そこまで綺麗に整理はしきれてないようなので、ヒアリングは何を目的に何をヒアリングするかというのと、ワークショップも言われる通り、何を目的にしていくかというのは、しっかり整理した上で、実施する必要があると思う。

○事務局

ご意見いただければと思う。

○委員長

そういう意味では、我々委員がいろいろとお願いをすれば、まだまだそこはフレキシブルに動いていただけるのであれば、すごくいいと思う。

○委員

実証実験を次回される時の告知の方法について、視覚に障がいがあると情報障がいを伴い、なかなかテレビや広報誌で告知をされても、情報が手に入らない方がたくさんおられる。公園を利用される方は、障がいのあるお子さんがいらっしゃる方、逆に親御さんに障がいがあり、連れて

行くことが難しい方、あとお孫さんを公園に連れていったりする方というように、色々な世代の方々が公園に関わるのかなと思うので、障がいがある方や幅広い世代の方たちに、情報が広がるように伝えていただければ嬉しい。

○事務局

非常に参考になる。広く情報が告知できるような方法はあるか。

○委員

視覚障がいに関しては、やはりコミュニティというか、私たちの大濠公園ブラインドランナーズクラブもそうだが、メールで発信したりしていることが多いと思う。メールで伝わったことを、それぞれが伝えていくというような形でちょっと時間がかかったりもするので、早めの告知がよい。実際、視覚障がい者の団体の活動されている人たちに情報を伝えれば、どんどん伝わっていくと思うので、お願いしたい。

○委員長

では全体を通して意見等あれば、願います。

先ほど、幅広くご意見いただきたいという内容が四つあって、まず「整備目標」、どこにどれだけ整備するか。次に、「整備内容」、どのような遊具や施設を整備すべきか。三つ目が、「周辺施設」、トイレとか遊具以外に、周辺にどのような施設が必要か。最後に四つ目で、「運営方法」どのように維持管理、運営をしていくか、この四つが挙げられていたが、この四つに限らず、それぞれ皆さん、これだけは言いたい、あるいはこういう風に考えている、こういうアイデアもあるんじゃないかということがあれば、自由に、拡散型で結構なので、ぜひいろいろとご意見をいただきたい。

委員長として、ちょっとやり方を決めさせていただきたい。1人ずつ、今の四つのポイント、あるいはそれ以外のポイントでも結構なので、思いを皆さんに話していただいて、そこから、議論した方がいいかなと思う。

○委員

今の四つについて、自分の中でまだ整理は出来ていないが、先ほどお話のあった実証実験というのがすごく大事だと思っている。実証実験を行う上で、先に公園のイメージがないと実証実験にならないと思うので、インクルーシブ的な観点で見た時に、障がいのある子とない子が自由に遊び合ってる雰囲気イメージする必要がある。例えば学校現場であればそのイメージが湧く。小学校であれば特別支援学級のお子さんと通常の学級のお子さんが交流とか、共同学習とか行っている。そのため、この公園を、学校の授業で活用してもらおうとよいと思う。その中で、例えば学校からここまで車椅子を使うお子さんがいたら、車椅子の動線を辿っていくとよいと思う。今回、私も実証実験を見に行ったが、結構坂が多かったり、公園まで行きづらく、公園の場所がわかりにくかった。随分探して、公園までたどり着いた。なので、実際の動線をずっと辿っていく中で、子どもたちがどう感じたかというのはモニターできると思う。

それと、保護者に対しても、学校からお話をすると、協力してくださる方がたくさんいる。PTAの方でお願いをして実際に休み時間使ってもらおうとか、うまくいけばその子どもたちが遊んでる様子をちょっと参観に来てくださるとか。実証実験の場所の近隣学校と連携をとりながらワークショップ的に行うとよいと思う。東京でも子どもたちがワークショップをしたとあったが、ぜひ子どもたちを使いながら実証実験もしていただけたらよいと思う。

公園づくりをどのように進めるか、どのような遊具や施設を整備すべきかというのは、今回いろいろ出た。私も、先ほどお話があったように車椅子を砂場で動かすのはかなり厳しいと思って

いる。砂地をよく見ると、段差があったり、石があったりする。だとすれば、どんな障壁が、その子どもたちにあるのだろうかということを整理しながら、その障壁を取り除くという意識に立った時に、多分ユニバーサルデザイン的な感覚になると思う。その障壁をどうクリアしていくのか、例えば車椅子のお子さんがそれを越えている様子を見ることで学ぶこともあるだろうし、障がいのある子とない子が互いに学び合える場があるのではないかと思う。

ちょっと教育的になって申し訳ないが、そのようなことを繰り返す中で先ほど委員長が言われたインクルーシブ的な公園としての価値がすごく上がると思う。公園は、そうやって作り変わっていくものだと思う。最初作って行って、実際に使う中で改善して行って、完成に近づいていくという、その営みも視野に置きながら、そうすると、公民館などで人の意見を聞いたりとか、より市民の方と連携しながら創るモデル公園みたいな感じで作っていくのが大事だと思う。どのような遊具施設を整備すべきかというのは、今あるものを使いながら、今の課題点をどう改善していけばよいかという視点で、検討してみるというのもよいのではないかと思う。

周辺の施設については、今言った形で動線とか考えていくと、かなり整備しないとモデルにはなりづらいところがある。だから、公園だけを作ったから使えるかということそうじゃないのかなと思っている。維持管理や運営も含めながら検討していかないといけない。そう考えると、これはすごく大きなプロジェクトだなと思う。だけど視点としては、すごくいい。教育も福祉的な部分もすべて包含していく、福岡モデルとしても最高にいいなと思っているので、次回実証実験に向けて協力させていただければと思う。

○委員

私は車椅子で生活しているが、一番最初に考えたのは、先ほど委員の方からもお話あったが、公園で遊具を作って、それでこう満足なのかっていうところがあって、周りの環境が、そこを利用する人にとって利用しやすいのかどうかということも、考え合わせないといけないと思う。

実際に、駐車場から段差があったりとか、坂があったりとか、そういう風になってくると私たちは、非常に行きづらい。行けば、その遊具は使えるだろうが、そこに行くまでのルートが、きちんと整備されないと、なかなか行こうかなっていう気にならない。そういうのがもう大前提。

それと、やはり障がいは、いろんな障がいの方がいる。すべての障がいに対応するとなると、かなり厳しいというか難しいところはある。実証実験をする中で、ある程度限定したところでの取り組みをまずやってみて、それから少しずつ幅を広げていくっていう形が、一番いいのかなと思う。先ほどもお話があったが、やはり車椅子だと、舗装とかそういうのがないと、移動しにくい。そういうところが整備されていると非常にありがたい。アメリカの例では、土とか、ああいふところがなかったように思う。移動しやすいとか、そういうところをしっかりと頭に入れて、していただくと、非常に意味がある公園になると思う。

○委員

『インクルーシブ公園』という用語にちょっと違和感があって、そもそも公園はインクルーシブなものだろうか？っていうところから。（注：インクルーシブ公園をつくるという発想は、既存の公園はインクルーシブではない＝排他的だという前提の上で成立すると思う。しかし、障がい児をもつ私たちの実体験では、公園から排除されているという感覚は全然ない。仲間で意見交換したのがみなさんそうだった。福岡市では長らくユニバーサル福岡の取組みを推進されていて、ユニバーサルデザインのすばらしい公園が市内にたくさんある。また、インクルーシブという言葉はまだ一般市民の多くには馴染みのない、わかりにくい言葉でもある。インクルーシブという用語の使用が適切なのか疑問に思う。）でも、公園の中で、いろんな子どもたちが楽しく遊べるようになるのはすごくいいことなので、このような公園ができることは、いろんな可能性を含んでいると思う。例えば、今はコロナでいろんなサークルが活動できなくなっているが、教育大学の

学生さんとか、障がいのある子どもさんに、教育実習とかで、こういう場に来ていただいて、子どもたちと触れ合うとか、そういう勉強の場にもなると思う。

これは、インクルーシブになるような仕掛けの一つであるが、そういうのがあったり、遊びに行くにしても、すごく環境が大事で、障がいのあるお子さんは、本当に多様なお子さんがいる。遊具があっても遊べないお子さんもいると思う。そのお子さんたちが、公園になぜ遊びに行くかとか、そういうことも考えながら、寝そべって風を感じるのも気持ちいい、それも公園に行きたい一つだとか。そういう遊び場だけではない他の面もちょっと考慮しながら、公園を作っていただきたいと思うし、色々な面で検討していただきたいと思う。本当に福岡市には可能性がある、福岡市は自信持っていていいと思う。本当にユニバーサルデザインがいろんなところでできていて、浸透していると思う。

○委員

まずは、どこにどのように、について。私は今、大濠公園、春日公園で練習をしているが、なぜここを利用しているかという、やはり先ほど委員が言われた動線、すごく駅からアクセスしやすい。公園まで1人で行けるとというのが私にとって利便性がいいところ。やはりアクセスがすごく大事で、そこまで行けなければ何も始まらない。「また行きたい」と思うかというところで、人の手を借りずに行けるってこともすごく大事なのかなと思う。

どのような遊具、について。私は、目が不自由なので遊具自体はあまり知らないで何とも言えないが、先ほどの事例で、カラーリング、コントラストをしっかりとつけて、路面の区別などは、弱視の人でも自分1人でできるというところが、とてもいいことだと思う。大濠公園も路面のコントラストがあるので、私たちが利用しやすい。

遊具以外に周辺にどのように、について。例えば、大濠公園に県外から来る方もいらっしゃる。公園を利用した後、食事や周辺の施設での楽しみがあり、そこで出会った仲間との親睦が図れるような立地が理想だと感じる。障がいがある人も利用する為、バリアフリーのトイレやスロープ等敷地の広さも必要になるが、同様に利便性も大事だと思います。

どのように維持管理運営していくか、について。視覚障がいがあるので、例えば、周りでプールの監視員のように利用者を見てくださる方がいるというのはとても重要だと思う。

コミュニケーションが取りにくい視覚障がい者と聴覚障がい者。点字ブロックがあると嬉しい視覚障がい者と、できればフラットな路面が好ましい車椅子ユーザー。異なるニーズにも対応できることが、みんなの公園に大事だと思います。また、多様なニーズに対応できる考え方や伝え方ができる管理者や地域ボランティア等の人材育成が大事だと感じます。共に学びあうワークショップ等を繰り返し、みんなでより良いものにしていけたら嬉しいです。

○委員長

いろんな意見が出て、大変よかった。時間ももう5分で、7時になってしまうので、また、別の機会で議論したいと思う。最後ちょっと簡単なまとめをしたい。

委員の方からは、近隣の重要性。学校とかそういうところを巻き込んで一緒に作っていくと。福岡モデルという言い方が何かすごくいい。

それから、委員の方からは物理的な環境をどう整備していくか。ということがあった。それと、誰を対象にするか分かった上で、広げていく。だから、この人にはこう、がわかっているればよい。誰でも対象と聞いて、もし行ってがっかりすることがあったら逆効果だから、その理解をきちんと作っていく必要があると思う。

委員の方からは、インクルーシブ公園の違和感というのは、私もそう思う。やはり皆さんと一緒に、インクルーシブ公園の定義というか、福岡ではこう考えるというのを、一緒に考えていくのがいいと思っている。それにはおそらく、こういう場が社会の仕組みとして、どう、動いてい

くかとか、単に遊ぶだけではなくて、遊ばない公園、寝そべったり、そういうのも含めて多様性がある。

それから委員の方からは、1人で行ける、人の手を借りずにというところが大変印象に残った。誰かに助けてもらってという先入観があると思うが、実はそうじゃないというところを強く考えていきたいと思う。食事とか、公園での行為の魅力も大きい。何が楽しみかは、人によってかなり違うと思うので、多様な楽しみ方がきちんと目的として入っている公園づくりがあったらいいなと思う。最初私は、街区公園がいいと思っていましたが、人の関わりという意味でいくと、誰かがいるということになると、総合公園のような大きいところで、人と人の繋がりができる方にメリットがあるかなと感じた。監視員とかプレイリーダーなど、空間だけじゃなくて人の仕組みも含めて、トータルに考えていかないといけない。また多様な人々の間のバリアフリーコンフリクトをどう解消するかについて、私はジャーニーマップによって、その人の視点で、具体的にじゃあ駅からどう動くかをジャーニー（一連の体験）というが、それを全部マップにする。車椅子利用の人はどうか、視覚に障がいのある人はどうかという風に、マップで考えると、抜けてるとこがよく見える。そういう形で、ぜひここでのノウハウを、ヒアリングをもとにして、まとめていけたらいい。

駆け足ですがまとめでした。どうも皆さん議論ありがとうございます。

ここで進行を事務局にお返しする。

○事務局

大変活発なご議論いただき本当に皆さんありがとうございました。

本日いただいた意見は、まず議事録に起こし、委員の皆様にご確認いただいて、ホームページ等で公表させていただきたい。インクルーシブな検討委員会ということでもあり、資料と共に動画もホームページで見れて、聞けるようにすれば、視覚障がいの方も聞いて理解できたりすると思う。そんなこともチャレンジしていきたい。

それでは次回の検討委員会の時期は8月頃を目途に、また詳細の日程や会場等は改めてご案内差し上げたい。引き続きどうぞよろしく申し上げます。

〈閉会〉。